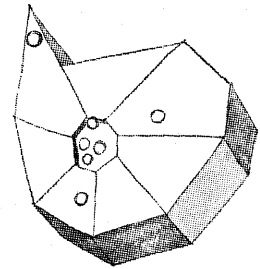


開 け ゆ く 未 来

保育の一日と、積み重ねられる全体との関連

保育は、一日一日と充実させてゆく仕事である。一日の保育に意味がある。しかも、一日だけでは終らない。その一日が積み重ねられて全体となると、その一日の意味は、一層の充実さをもって明瞭になる。

新たな一日は、実践においても、解釈においても、不確実である。たとえ不確実でも、新たに発見される意味によって、全体の性格が変えられる。新たな一日は、まだ不確実な一日だから、思い切って新たな実践と解釈が可能になる。それによって過去の意味も変えられる。



津 守 真

新たな一日は、じきに過去になる。そして全体の中で意味を獲得し、充実さを増す。そのことは、保育者に安定感を加えるが、同時に、それが先入観となる危険もはらんでいる。新たな一日は、大人にも、子どもにも、前日とは違う一日だから、過去に獲得された解釈から解放されて、現在の現象を新たな目で見るのが要求される。

しかしながら、過去に積み重ねられた日日の全体の中で形成された意味は、保育者の行為の根底に沈澱し、無意識の中で活動していると考えられる。新たな目で見ることは、ひとたび形成された意味を絶対化することなく、現

象の本質を問う試みに何度も立ち返ることである。

未来は、子どもにも大人にも、未知なものとして開かれていゝる。実際は生活上の計画があつても、それが現実となるときには、外的にも内的にも、新たなことが生じゝる。そのことが前提として、認識されないと、未来は閉されたものとなり、新たに生きる眺望を失つてしまふ。そのことは、決して、未来はバラ色に楽観できるものだといふことではない。また、着実に成果を上げ得るものだといふこともない。むしろ、新たに迎える保育の一日は、かわりばえのしない、困難な今日のつづきであるかもしれない。しかし、その中にあつても、子どもとの生活の中には、常に新たに発見される未知の現象があり、その本質を問う試みは、われわれに対して新たに開かれていゝる。

朝、こういうことを考えていても、保育の場に出ると、たちまち、具体的なできごとの中に投げこまれる。そうして、頭の中にあつたことは数分後には忘れてしまふ。思いがけない子どもたちの姿に出会い、その要求に

こたえ、判断し、交わり親しみ、一日を終る。不思議なことに、それが素材となつて、生きた全体像を形成するのである。

弁当のおぼんを持歩くこと

食事のとき、S夫は、自分の弁当を置いたおぼんを持って歩き、落ち着ける場所をさがすが、なかなかみつからない。何度も移動した後坐つた食卓で、隣に坐つていゝた子どもが、偶然にコップをひっくりかえし、その水がS夫のおぼんにこぼれた。S夫は大声を出し、その子どもを引張つた。それからおぼんを持って、ホール隣の滑り台の上に坐つて食べはじめた。私の傍に坐つて一緒にいた。食事が終ると、私と追いかけてこをしたがゝる。私に追いかけてさせ、私を見て走る。ときどきつかまえてふざける。

この数週間、S夫は、弁当をおぼんの上において持歩き、食べる場所をさがす。大たいにおいて、高いところ

の狭い空間が多い。他の子どもから妨害されない、安全な場所をさがしている。この日は、めずらしく、皆の中で位置を定める。ところが、隣に坐った子どもの水が自分のおぼんにかかると、境界をこえて自分の領域が侵されたように感じるのであろう。その子どもの髪を引張る。S夫が他の子どもの髪を引張るのは、自分の境界が侵されたという被害意識が働いていると考えられる。

食べることは、外界の物の領域にとりいれ、獲得する行為である。そのときに、S夫は、自分の食べる分を、区切られた境界の中に確保する。自分の領域が侵される体験を過去に積んできたのではないかと推察する。私は、S夫が食べる間、S夫の傍にいて、他人である私はS夫の領域を侵す者ではなく、守る者であることを知ってもらいたいと思う。S夫も私を拒否せず、一緒にしゃべったり笑ったりする。

食事が終ると、S夫の方から、私に追いかけて、目を合わせ、つかまえられて笑ったりする。自分の領域に他人の手がのびてくることを、現実の緊張感の中ではな

く、遊びの中で体験する。

大人から注目されることと小さい子どもを押し倒すこと

次の日の朝、S夫は登校するとすぐに、私に「おめでとう しよう」と云う。以前に実習生と折紙をちぎり、まき散らして遊んだことがある。そのあそびのことを「おめでとう」と云う。裏庭の静かなところで、私は折紙を切り、S夫ははさみで半分刻みをいれてからちぎる。少しまると、おめでとうと云ってまきちらす。そのときに、パチパチと手を叩いてにぎやかにすることを要求する。そうすると、S夫も手を叩いてはしゃぐ。桜の花びらの散る下で、私と落着いて何度もくり返して手を叩いた。S夫と二人で交るいい時間だったと思う。

そのあと、体の小さいM夫が滑り台を下から上ってゆくとところを、私が後から手をそえてやっていると、急にS夫が私の腋の下からもぐりこんで、M夫を押し倒し、髪をつかんで引張る。私が思わずその子をかばうと、一

層激しく髪を引張る。

いちばん小さいK男がひとりでもボールをいじっている。私が近寄ると、K男は私に抱きついてくる。そして私をしゃがませ、馬のように四つ足で歩かせる。私はK男とホールを歩きまわっていると、S夫がきて、K男を押し倒し、髪をひっぱる。私は急いでK男をかばうが、S夫の方が早いので間に合わない。

こういうことが頻発するので、大人は、小さい子どもを守ることに追われてしまう。こんなとき、S夫にどのように話しても、また、どのようにとめても、じきに同じことをくり返す。S夫の側にもそうしなければいけない理由があるように思われ、それを無視して一方的に強い対応をするのは、よいことと思われない。しかし、現実には、小さく弱い子どもとの間に、たえず葛藤を起すので、S夫を無視したり拒否したりすることが多くなる。こうして、S夫と小さい子どもたちとの間で右往左往して一日が過ぎてしまう。

このようなことが相次いで起るのを体験すると、この子どもが大人に注目されるのを求めることと、小さい子どもの髪を引張ることとの間には関連があるように思える。この子どもは、見られることに敏感であると同時に、見ることに敏感である。自分のしていることに注目してもらいたい気持が特に強い。また、大人がだれに注目しているのかを見ることに早い。この両者が相互に関連していることを、この子どもの行為はよく示している。

私が他の子どもと遊んでいると、す早く走ってくる。髪を引張るS夫が拒否的な眼を向けると、そのことをも敏感に察知する。そして、S夫にだけ手をかけるような遊び（大人が両手両足をもって揺らすあそびなど）を要求する。

この子どもは、大人から注目され、見られることにより、自分の存在感を確認している。過度と思えるほど、見られることによって存在を拒否された体験があるからだろう。自分のしていることを、大人に見てもらい、承認してもらいたいというのは、どの子どもにも共通のこ

とである。そのときに、承認と励ましの眼でそっと見られていないと感じるときに、子どもは、どこまでも承認の眼による注目を要求する。

見られるときに、自分の存在を拒否されたと感じるときには、他人を見るときに、その人が自分の存在を拒否するかどうかを、敏感な眼でうかがう。この子どもの場合、見ることが、自分自身の喪失感につながるが多。大人が他人をかばって、自分を拒否することを察知したときには、その喪失感を埋めるために、具体的な物を獲得しようとする。つまり、小さい子どもの髪をつかむのである。それによって、大人の注目を獲得すること、存在を強化することである。

見ること——得ること——在ること、見られること——失うこと——存在を拒否されることは、それぞれ相互に関連し合っている。いろいろの場合を考えてみると、そのことは確かめられる。この子どもの場合には、獲得しようとしているのは、単なる物ではない。もっと存在の根底にかかわる。大人から存在の価値を認められ

ることである。

こう考えると、S夫が他人の髪を引張るときに、その行動を否定するあまり、S夫に不信の念を起させてはならないと思う。しかし、他方、小さい子どもの方は、かばってくれる大人を必要としている。私が小さい子どもをかばうと、S夫は一層激しくその子どもに向う。子ども同士に任せられる場面をつかれるとよいのだが、それがなかなかむつかしい。

中間に立つ保育者

二日後に、R夫が手にマイクを持っていたら、S夫が近寄って、それをとった。R夫はそれをほしがったが、S夫の方が強く、それを持って別の部屋にいった。私はどちらにも加担せず、他のことをしていた。しばらく後に、S夫のマイクは放り出されてあった。R夫がそれを拾って持っていた。

この日、小さい子どもとの間に葛藤があっても前日の体験から私は静観していたことが何度かあった。子ども

の間の葛藤の渦の中に巻きこまれないで、距離を保っている、見えてくるものがある。子どもなりに、その状況を乗りこえようとしていることがわかるし、それぞれの子どもが、そうせずにいられない、自分自身の課題があるらしいことが、その場でほのかに理解できる。それに応じて、こちらの対処の仕方も違ってくるから、反射的に対応しないでよかったと思うことがしばしばある。

この日も、見ていると、髪の毛を引張られた方の子どもも、比較的早い時間に立ち直り、自分の遊びをつづけられるようになっていく。また、私が立ち入らないと、S夫の方も、そんなにひどく向わない。いずれにしても加担せず、距離を保って見るといえるのは、決して、子どもとは次元の異なる場所に立って傍観することではない。いつでも、必要があれば子どもを助けられるようにして、緊張した関心を保ちつづける。そして、それぞれの子どもが、葛藤場面の困難をのりこえて、自己実現の活動に向うことができるように、間接的に、子どもに気づかれないところで、条件をととのえている。

普通の場合には、子ども同士の解決に委ねてすむことも多い。しかし、小さい者、力の弱い者が一方的に押し倒されたり、髪を引張られることが多いと、子ども同士に委ねることができないのは、ごく幸運な場面に限られる。どうしても保護せねばならないことも多い。それのみでなく、本来、子どもの仕事は、弱い者の側に立つ仕事であり、小さく弱い者が被害を受ける事態に当面すると、大人の側に、それは許せない感情がはたらく。しかし、そのあまり、もう一方の側の子どもの行動を、攻撃・暴力とのみ見て、その子どもにとってのその行為の意味を見ることができなくなったら、保育とは云えなくなる。そして、保育する者でありながら、保育者の目を失ってしまふ。

この日は、私は中間に立つことが許されるほどに、だれもが調子が良かった。しかし、これだけでは事態は解決しない。S夫自身の精神的課題を見きわめ、その解決を助ける保育を必要としている。それは、保育の過程の中で、次第に明かにされてゆく。

(愛育養護学校)